

The Salt Lake Tribune

角 永 和 夫 の 自 発 的 芸 術

文・ブランドン・グリッグス ソルトレイクトリビューン アート

一見、角永和夫の作品は不可解です。平行線が刻まれた巨大な杉の丸太です。壁にもたれて、長さ 15 フィートの竹の棒の列。蜂の巣の形をしたガラスの塚。

しかし、それらを綿密に研究すると、角永の好奇心旺盛な作品の背後にある独特のビジョンが浮かび上がり始めます。現代美術の多くのトレンドが尽きる中、角永は、平均的なコレクターによる家庭での展示には実用的ではないにしても、その作品が驚くほど独創的である珍しいアーティストです。

彼の個展「Wood・Paper・Bamboo・Glass」は、金曜日に新しく改装されたソルトレイクアートセンターで開かれ、11月25日まで開催されます。日本生まれの国際的なアーティストによる20年間の作品を-spanし、最初のショーとなります。2002年冬季オリンピックの展示スペースを増やすために階段の入り口が再構成されて以来、センターのメインギャラリーにあります。

広々としたギャラリーは、角永の大規模な彫刻作品にふさわしいと感じています。その中には、距離の視点を評価する必要があるものもあります。しかし、角永の作品を真に理解するためには、彼がどのように作品を制作するかについての背景が必要です。

ショーをキュレーションしたソルトレイクアートセンターのディレクター、リック・コリアーは、「和夫は常に、どのアーティファクト自体よりも（アーティストック）プロセスに関心を持っていました。」と語った。結果として得られる作品は美しく神秘的ですが、副産物にすぎません。素材を通じて未知を追求する彼の消費する情熱の。天然素材の操作。

角永の作品の長年のファンであるコリアーは、16年前にロサンゼルスでこのアーティストと初めて出会いました。コリアーは1988年にテキサス州コーパスクリスティで角永の個展をキュレーションし、5年前にソルトレイクアートセンターのディレクターに就任して以来、アーティストをユタ州に連れて行こうとしています。

角永が1971年に本格的に美術を始めたとき、その感触が好きだったからではなく、家族が北日本で製材所を経営していて、木材が豊富で安価だったため、木材に惹かれました。その後、彼は竹、紙、絹、ガラスを試しました。角永は母国のシンプルな特徴を活かして、これらの原材料をいじくり回して、物理的に変化したり、環境の変化にさらされたりした場合の反応を確認します。



Translucent green glass forms a beehive shape in
“Glass No 4 M.”



Handmade paper is layered “Paper No.1BF,” a 1983 work by Kazuo Kadonaga

たとえば、展示品の1つは、長さ約15フィートの樹皮のない杉の丸太です。角永はテーブルソーを使って丸太を数百枚の紙のように薄くスライスし、組み立て直しました。木材が温度と湿度の変化に反応すると、紙のように薄いシートが曲がったりカーブしたりして、丸太の外観が変化します。

このように、角永は彼の素材に彼らの究極の形を指示させます。最終結果はランダムで、予測不可能で流動的です。数年前のインスタレーションでは、角永は杉や竹を割れる寸前まで乾かし、ギャラリーに置いていました。訪問者は近くの椅子に座るように求められました。彼らが静かにしていれば、彼らは木のひび割れを聞くことができ、2つの材料の明確な聴覚的および視覚的特徴を明らかにしました。

同様に魅力的なのは、角永の半透明の緑色のガラスの塚で、それぞれが内部から光っているように見えるスポットライトによって上から照らされています。長年の実験の後、角永は熔融ガラスの粘性品質に興味をそそられました。彼は2,600度の窯でガラスを溶かし、それを下の冷却炉に連続的に滴下して、硬化するのに3か月以上かかる層状のうねる形状を作成するシステムを開発しました。

結果は、宇宙人の幼虫またはソフトクリーム of イメージを思い起こさせます。彼らは、オリンピック中にカラフルな作品がギャラリーに生息するデイル・チフリーの彫刻ガラスとはかけ離れています。通訳を介して話す角永は、彼の仕事の自発性を楽しんでいると言います。彼は自分の作品がどのように進化するかを前もって想像し

ておらず、完成したときにどのように見えるかについても期待していません。彼は芸術的なプロセスをできるだけシンプルに保つのが好きです。評論家のジョシン・イアンコ・スターレズは、展覧会に付随するカタログの中で、

角永の作品を「シンプルで、きらびやかで、巧妙ではないが、あまり印象的ではない」と呼んでいます。イアンコ・スターレズは、木やガラスが「単に要素、つまり問題の核心として提示されている」のを見たことがないと述べました。これ以前は、アーティストが演じる素材として登場していました。

木材は常に荒削りで、滑らかに研磨され、巧みに彫られていました。これは違いました。目の前の要素を見れば見るほど、アーティストの意図が明確になりました。素材の本質がメーカーの意志に取って代わった」と語った。角永のアートを楽しんでいるかどうかにかかわらず、そして彼の一眼シンプルな作品は、一部のオブザーバーに頭を悩ませる可能性があります。ユタ州のすべてのアートギャラリーにアクセスしても、そのようなものは見当たりません。そしてそれは褒め言葉です。

■ 所・ソルトレイクアートセンター

「角永和夫：木・紙・竹・ガラス」展は、11月25日までソルトレイクシティのサウスウエストテンプル20番地にあるソルトレイクアートセンターで展示されます。

センターは月曜日を除く毎日営業しており、入場は無料です。